

インド 生食用ブドウは新たな品種で輸出機会の拡大へ

[FreshPlaza](#) 2025年9月1日

インドは新たな生食用ブドウ品種の導入により、輸出機会の拡大に向けた準備を進めている。

インドの生食用ブドウ輸出産業は、同国の生食用ブドウの世界的な展開を拡大する可能性のある複数の新しい品種の導入により、有望な段階に向けて準備を進めていると、青果物輸出業者サングルアグロプロセッシング社のラジャラム・サングル氏は述べている。同氏は、「2024-25年度の輸出シーズンは、欧州、極東、中東での旺盛な需要とケニアへの試験的輸出によるアフリカ市場への有望な参入が特徴であり、近年で最も素晴らしいシーズンの一つであった」と強調する。(以下「」は同氏の話)

「昨シーズン、弊社は欧州、英国、北米、それに中国、香港、台湾、マレーシア、タイなどのアジア太平洋地域の市場に向けて、2,500トン以上の生食用ブドウを輸出した。また、ケニアへの試験的な出荷も好評を博し、アフリカ市場への参入に成功を収め、ガーナやウガンダなど近隣諸国への将来的な輸出の道が開かれた。」

季節風(モンスーン)による雨が通常より早く5月に降り、シーズン後半に収穫を迎える生産者を中心に課題となったが、サングル氏は、80%以上の生産者が事前に収穫を完了しており、全体として高い品質と輸出量が確保できたと指摘する。同氏はさらに、「インドの広大な生食用ブドウ園は、気象関連の混乱に対する回復力を備えている」と補足した。

現在の輸出の中心は、依然としてトンプソンシードレス及び果粒が細長いツノカといった伝統的な品種であり、これらは特に極東及び中国市場で人気が高いとサングル氏は述べている。「赤ブドウのフレーム品種は、中東及び極東で引き続き市場を獲得しているが、欧州では物流上の課題により存在感が薄くなっている。特筆すべき点として、過去6~7年にわたり集中的な研究と生産者の訓練を行いながら栽培されてきたクリムゾン品種は欧州の消費者をターゲットとしており、次第に供給量が増加している。」

サングル氏は、ブルームフレッシュ社(SNFL社傘下)との協力により、来シーズンに導入予定の4品種を強調する。「現在試験栽培中のティムコ、ティンプソン、アリソン、アイボリーの各品種は、悪天候に強く、生産コストが低く、貯蔵性に優れるといった利点があり、これらは欧州のスーパーマーケットと世界のバイヤーの需要に応える上で重要な要素である。2026年には、ブドウの品揃えの拡充に関心のある欧州の主要スーパーマーケット向けに、これらの品種の試験的な出荷を実施する計画である。」

競争力の観点から、サングル氏はインドの生産コストが南アフリカやチリと比較して低いことが、輸入業者にとって価格と品質の両面で優位性をもたらすと強調する。「インドの好ましい天候条件により収穫スケジュールを計画、管理することができ、12月から6月まで供給可能で、長期にわたって輸出期間を確保できる。」

サングル氏は今後について、スーパーマーケットの需要と品種の導入を原動力として、来シーズンの輸出量が3,500トンに達すると見込んでいる。「貯蔵期間の長い品種は最大60日の輸送にも適しているため、新たな市場として北米、特にカナダも視野に入れている。品種の革新と綿密に練られた輸出戦略により、年間を通じて高品質な生食用ブドウの供給を目指す。」

同社は、香港で開催されるアジアフルーツロジスティカに出展する予定である。(出展の詳細省略)

執筆者: アリーシャ・フェルナンデス

(翻訳は情報の提供を目的としており、特定の企業や製品を推奨するものではありません。)